

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520124

研究課題名(和文)近世中・後期における禁裏絵所預土佐家と内裏の造営

研究課題名(英文)Tosa,Court Painter and the construction of the Imperial Palace in the modern era

研究代表者

岩間 香(Iwama, Kaori)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：50258084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：寛政度内裏の造営資料である「御指図御用記」を読み解いた結果、次のことが明らかになった。(1)禁裏画所預の土佐光貞が内裏の障壁画の絵師たちを統率する様子が明らかになった。病気の絵師には同じ流派から後任を選出し、年少の絵師については絵画の技量を確認していた。(2)土佐派の弟子の中に大坂の絵師が含まれていた。その中の桃田三笑、佐野龍雲の作品を大坂で見出した。しかし画風には土佐派の要素が少ないため、内裏の仕事をするために土佐と結びついた可能性もあった。(3)屏風の飾り方を示した図を数種類見出し、宝永度内裏における観能、寛政度内裏における年中行事の空間が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In reading the "Osashizu Goyouki" material for the Imperial Palace construction in the Kansei Era, the following was revealed. (1)The manner in which the court painter, Tosa Mitsusada, took leadership of the painters of wall paintings of the Imperial Palace. For painters that were ill, a successor from the same school was elected, and for younger painters their painting skills were verified. (2)Among the disciples of the Tosa school, painters from Osaka were included. The work pieces of Sanshou Momota and Ryourin Sano were found therein. However, since there were few elements of the Tosa school in the painting style, there is a possibility that an association was made with Tosa in order to perform work for the Imperial Palace. (3) Several diagrams were found showing the manner in which the folding screen was decorated, and a space for observing of Nou in the Houei era Imperial Palace and annual events for the Kansei era Imperial Palace was revealed.

研究分野：日本絵画史

キーワード：土佐派 内裏 障壁画 大坂 復古 流派

## 1. 研究開始当初の背景

内裏はしばしば火災に遭い、近世のみでも8回建て直されている。その様式は平安時代から大きく変わり、江戸時代後期には書院造りの武家様式と変わらぬ建築となっていた。しかし寛政度内裏において、裏松固禪の『大内裏図考証』に基づき、平安時代の復古様式で造営された。

寛政度内裏に関しては、藤岡通夫『京都御所』、平井聖『中井家文書の研究7』などがあり、建築指図などによる平面分析が行われている。また復古様式の復元過程については、島田武彦が『復古清涼殿の研究』で検討している。さらに千野香織は「建築の内部空間と障壁画 清涼殿の障壁画に関する考察」『日本美術全集 16』で障壁画の画題を分析している。また裏松固禪については西和夫、小沢朝江、吉田早苗らの研究がある。寛政度内裏は焼失して現存しないことから、障壁画や内部空間については文献でしか判明せず膨大な資料の読み込みが必要であった。

これまでの研究では、文献以外のどのような資料に基づいて復古様式を実現したのか、また出来上がった殿舎の障壁画を含む内部空間はどのような特徴があったのかについて、十分な研究が行われてこなかった。

申請者は平成6年度から度々科学研究費補助金により、土佐派絵画資料、木子文庫、中井家資料などの整理調査を行い、寛政度の内裏関係資料を収集してきた。平成16年には住宅総合研究財団助成金により裏松固禪「院宮及私第図」を調査し公刊した。これらの実績から内裏のしつらい空間の解明と、空間装飾に大きな影響をもったと考えられる土佐派について解明することを計画した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は内裏における儀式のしつらい資料を収集し、その空間分析を行うことである。障壁画や建築と異なり、儀式の場の

洗濯や屏風など可動的なしつらいの実態については、ほとんど研究がない。そこで各時代の宮廷儀式に関する絵画・指図・起こし絵図・文献の収集を行い、儀式の種類・建物・公私の別による特徴を明らかにする。復古様式内裏以前と以後のしつらい図の比較分析をおこない、復古内裏の儀式空間の根拠を明らかにする。

さらに寛政度内裏における復古様式の資料収集や図の制作に寄与した禁裏絵所預の土佐光貞について調べる。土佐家の人脈と流派体制が内裏の障壁画制作にどのような影響を与えたのかを分析する。

## 3. 研究の方法

(1) 寛政度内裏造営の同時代記録である「御指図御用記」「桂宮家文書」などの解読により、復元の過程を明らかにする。

(2) それぞれ宝永度、寛政度内裏造営時の画所預である土佐光芳・光貞その他の土佐派の絵師の作品を調査し、資料を収集する。

(3) 「御指図御用記」から、内裏障壁画制作における土佐家の役割を明らかにする。

(4) 「御指図御用記」「裏松家文書」を解読し、内裏のしつらい空間について明らかにする。

## 4. 研究成果

今回の研究における成果として以下の点が挙げられる。

(1) 「御指図御用記」「裏松家文書」解読と入力終了

「御指図御用記」は、ほぼ解読を終了し、コンピュータに入力した。これにより、画所預の土佐光貞の業務が時間を追って明らかになった。土佐光貞は鶴沢探索とともにすべての障壁画絵師の統率をし、病気の絵師が出た場合、その代わりに絵師を手配し、年少の絵師について技量に疑義が出されると、その吟味を行っている。絵師の交代については後

任に同門の絵師を起用するなど、絵師の帰属する門流に対する配慮が見られる。これは写生画や文人画など様々な新しい絵が登場した近世後期の京都画壇において、門流や流派に対する意識が強かったことを示している。これらの新事実の解明については 2015 年度中に論文を発表する予定である。

「桂宮家文書」については、内裏の復元に関する記述は少ないものの、土佐光芳など出入りの絵師の記録を多く収集することができた。

## (2) 土佐派絵師の資料収集

各地の博物館の図録、地方市史、美術商、インターネットサイトなどから、土佐派の作品の情報を収集した。とくに近世中・後期の土佐光芳、土佐光貞、土佐光孚などの作品を中心に調査し、新たな作品を見出すことができた。

また従来、土佐派研究は光起、光吉など土佐家の絵師のみが取り上げられることが多かったが、本研究では土佐派の門人について

も資料を収集した。そのために「御指図御用記」から土佐の弟子を抽出し、桃田栄雲、桃田三笑、佐野龍雲、垣枝専蔵などの門人名を抽出した。しかもそのうちの3名は現存作品を見出すことができた。

また土佐派門人の中には、大坂を活動の拠点としていた者が何人か見られた。すなわちこれまで知られていなかった大坂画壇における土佐派絵師の存在が明らかになったのである。その一人、土佐派門人を称する桃田三笑は大阪近郊の池田に在住する絵師で、内裏の西対の屋五ノ上段絵の担当であった。しかし病気のために辞退し、同門の鵜飼大之進が起用された。三笑については池田に現存作品があるが、土佐光貞の画風と似ておらず、画題も禁裏を意識したものではなかった。

また大坂の絵師桃田栄雲は画伝書には狩野派と伝え、文人画の日根対山の師として知られている。桃田氏はこれまで狩野派とされていた絵師である。しかし寛政度内裏の障壁画には土佐光貞の門人として参加していた



図1 佐野龍雲「住吉図」屏風 個人蔵

ことが判明した。あるいは三笑も栄雲も内裏の仕事をするために土佐と結びついた可能性もある。

佐野龍雲も大坂で活躍し、寛政度内裏では東対屋の杉戸に列女伝、常御殿の杉戸に中国の偉人像を描いた。2014年に龍雲の「住吉図」屏風を見出し紹介した(図1)。これは住吉浜の遊楽を実景に忠実に描いたもので、景観年代は1798~1802年に限定できた。作風は風俗画の要素が強く、禁裏の伝統を思わせるものは無かった。

以上の結果から、近世後期の大阪画壇において、土佐派を称する絵師が存在したことが判明する。しかし土佐光貞が清涼殿に描いたような倭画、すなわち歌絵や公家風俗などの画題や作風は見られなかった。土佐派の門人については今後も調査を継続し、その画風や土佐家との関係を解明していきたい。

### (3) 内裏の室内空間に関する解明

宮内庁書陵部資料からいくつかの儀式に

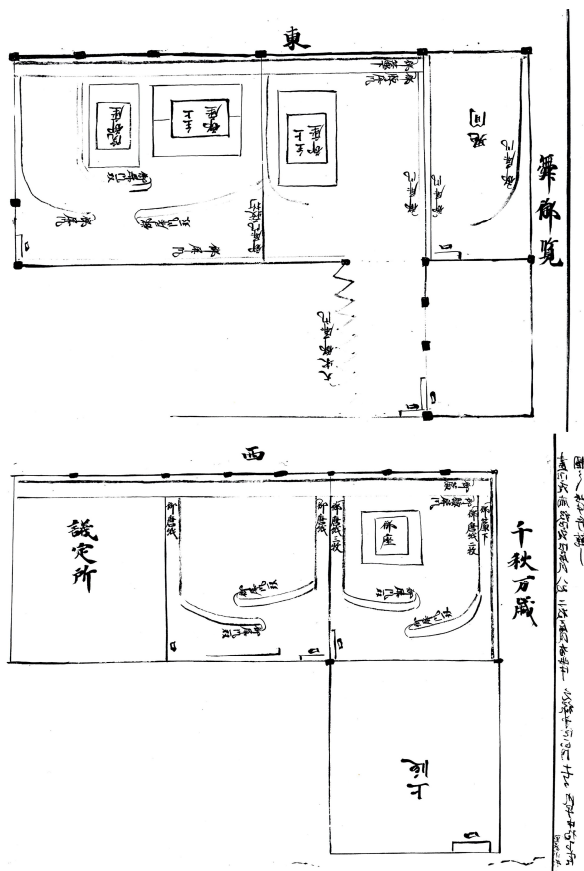


図2 「清涼殿構図」宮内庁書陵部蔵

おけるしつらい図を見出した。それらは宝永度内裏以前の書院造りの御殿におけるものと、寛政度内裏以降の復古様式による清涼殿のものが見出された。書院造りの清涼殿図としては元禄4年(1691)の延宝度内裏における舞御覧、千秋万歳御覧の屏風の配置図を見出した(図2)。御座の周囲を屏風で囲むなど、武家とは異なる独特のしつらいが明らかになった。また屏風の画題と筆者が記録され、琴棋書画、松竹鶴、刈田雁など、いずれも漢画の屏風であったことが判明した。

一方寛政度内裏の清涼殿については、年中行事のしつらい図を見出した。母屋の日御座は山水屏風や二の間の大和絵障子により囲まれていた。また東面は御簾、北は昆明池障子で遮られ、伝統的な絵画や調度が復古空間を形作っていたことが判明した。復古清涼殿の造営が、清涼殿の東庭を用いた行事の復古を促したことも窺えた。

また寛政度復古内裏を造営した光格天皇(1771~1841)の日記や、後桃園天皇の第一皇女欣子の御殿における雑祭の記録の読解を進めた。これらの新発見については2015年に論文をまとめる予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

岩間香「新発見「住吉図」- 大阪画壇の土佐派」『あんじゅ』61、2015年1月、p7-8、査読なし

〔その他〕

摂南大学研究業績検索システム

[http://gyoseki.ofc.setsunan.ac.jp/gyo\\_servlet/menu](http://gyoseki.ofc.setsunan.ac.jp/gyo_servlet/menu)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岩間 香 (IWAMA KAORI)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：50258084